



ある夏のふしぎな体験を通して 深まる友情物語

メディカ出版グループ
保育社

Book Review

作家 万城目学

たとえば書類の性別欄に「男・女」とあるとき、ほとんどの人は何も考えず、どちらかに○をつける。でも、「どっちだっけ?」と手にしたボールペンの動きを止めてしまう人もいる。

わたし、俺、ウチ、僕。

男性の外見だけど「僕」という呼び方に違和感がある人、女性の外見でも「俺」という一人称がしっくりくる人。自分の呼び方は自分で決められるけど、生まれたときの性別は決められない。

「LGBT」という言葉ができて、多くの人が、どうやら世界は「男」「女」の二つだけで成り立って

いるわけではないらしいぞ、と徐々に頭でわかり始めてはいるが、まだまだ偏見はある。

もしも、自分の身近に「男」とも「女」とも決められない友人がいたら?しかも、友人も自分の生き方について、どうしたらいいかわからず混乱していたら、あなたはどうかその友人に接するだろう?

この『にじ姫さまのいるところ』に収められた五編。いずれもやさしい気持ちにあふれた話なれど、友人たちとの日常に起こりうる誤解、対立、自問、和解を鋭く切り取り、フェアな眼差しで「LGBT」を描いてる。